

## 母性看護実習における学生のセルフエスティームの変化に関する研究

看護学科 塚本康子  
増田明美  
永谷実穂

### The Effect of Students' Practice Maternal Training on their Self-Esteem

TSUKAMOTO, Yasuko, MASUDA Akemi, NAGATANI Miho

はじめに

看護はもとより人間関係を基にしている。イギリスの社会学者ギデンスは、人との関係性はそれ自体がもたらす精神的な満足感にもとづいており、その関係は必ずしも不変ではないとしている。それぞれが自らの精神的満足感を追及し、相手の精神的満足感も尊重することが、人との精神的つながりを保証することになる<sup>1)</sup>、という。

人間関係においては、自分に対してある程度の自信や満足感、ありのままの自分を無条件で愛する気持ち「健康な自己愛」を持つことが必要である。管によれば、それによって自分の欠点や限界に臆することなく直面することができるし、他人との関係でも必要以上に気を使ったり防衛的になったりせず、自分を尊重するのと同様に相手のことを尊重することができる<sup>2)</sup>、という。青年期は、この自己の自尊感情にもっとも敏感な時期といわれており<sup>3)</sup>、生活習慣や精神健康度がその自尊感情と関連しているとも報告されている<sup>4~7)</sup>。また、多くの先行研究では自尊感情の変化をもたらす思春期・青年期における学習指導方法が報告され<sup>8) 9)</sup>、看護実習もそのひとつとなっていることが示唆されている。本研究では、青年期にある学生たちの「健康な自己愛」、セルフエスティームに着目する。セルフエスティームの形成には親の養育態度が影響するといわれているが、母性看護実習では他者を通して養育を体験するという貴重な機会を持つことができ、この実習が学生のセルフエスティームに影響しているものと推測できる。しかし、セルフエスティームを高める実習指導方法の検討はいまだ十分とはいえず、研究の蓄積が必要とされている。

そこで本研究では、母性看護実習における学生のセルフエスティームや健康習慣、精神健康度の実態を把握し、学習効果を高める実習指導方法を検討していきたいと考えた。

## I 研究目的

本研究の目的は、母性看護実習前後における学生の変化と体験内容を把握し、セルフエスティームにかかわる母性看護実習の問題と課題を明らかにする。

## II 研究方法

学生の実習前後における変化は、自尊感情として信頼性・妥当性が立証され多方面で活用されている、Rosenberg の開発した self-esteem scale 10 項目で測定する。また、自尊感情に影響するだろう健康状態については、Goldberg,D,P.によって開発された日本語版 GHQ 一般健康調査票の 30 項目版 (QH30)、健康習慣は Breslow.J の健康習慣 7 項目を用いることとした。学生のセルフエスティームには、実習だけではなく学生自身の特性も影響するだろうと考え、親子関係診断尺度 (EICA)を用いて家庭における両親との関係を分析することを試みた。個々の体験については、自由記述項目の内容分析で明らかにすることにした。

調査方法は、自記式によるアンケート調査とした。

1. 対象者 : A 短期大学 3 年課程看護学生 3 年生
2. 調査内容 : 基本属性、家族との関係、健康習慣、セルフエスティーム尺度、一般健康調査質問紙 (QH30)、親子関係診断尺度 (EICA)  
母性看護の実習体験内容、体験に対する自由記述の感想
3. 調査期間 : 平成 17 年 5 月～ 12 月
4. 倫理的配慮 : 文書と口頭で研究の趣旨、方法、中途中断の自由、個人を特定できないように処理すること、秘密厳守、自由意志による参加を説明し、成績には全く影響しないことを確約し、同意を得た者だけを対象とした。文書をもって同意を得た。
5. 結果の分析 : SPSSにより集計、クロス集計、t 検定、 $\chi^2$ 検定、重回帰分析、自由記述の内容分析

## III 結果

本稿では、母性看護実習前後における学生の健康習慣、セルフエスティーム、一般健康状態、及び実習での体験内容について述べていく。

### 1. 対象者の属性

回答が得られた対象者は 55 名 (女子 51 名、男子 4 名) で、平均年齢 21.7 歳 (SD4.0) であった。

### 2. 健康習慣について

健康習慣については、ブレスローの生活習慣の項目を用いて質問紙による調査をした。睡眠時間を 7～8 時間とっているのは実習前でも 25.5 %であり、実習後にはさらに減り 18.2 %となった。朝食はほぼ毎日とっているのは実習前が 83.6 %、実習後も 85.5 %であるが、これは摂っていない学生が 1 割以上存在していることを示している。運動習慣のあ

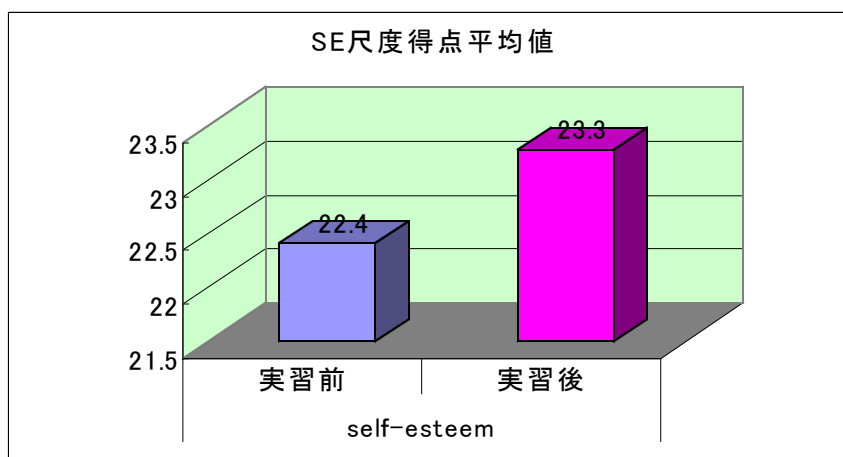
表1 実習前後における生活習慣 n=55

項目	実習前		実習後	
	はい	人 (%) いいえ	はい	人 (%) いいえ
睡眠時間 7～8時間	14 (25.5)	41 (74.5)	10 (18.2)	45 (81.8)
朝食はほぼ毎日とる	46 (83.6)	9 (16.4)	47 (85.5)	8 (14.5)
間食はあまりとらない	13 (23.6)	42 (76.4)	14 (25.5)	41 (74.5)
体重は標準である	45 (81.8)	10 (18.2)	46 (83.6)	9 (16.4)
運動・スポーツをしている	8 (14.5)	47 (85.5)	8 (14.5)	47 (85.5)
酒は大量に飲まない	54 (98.2)	1 (1.8)	53 (96.4)	2 (3.6)
タバコは吸わない	47 (85.5)	8 (14.5)	47 (85.5)	8 (14.5)

る学生はわずか8人・14.5%であった。母性看護実習直前と直後における変化は、検定では有意差はなかった。

### 3. セルフエスティームについて

実習前のセルフエスティーム得点は平均 22.4(SD5.8)、実習後は 23.3(SD6.0)と上昇傾向はあったものの有意差はなかった。(図1)



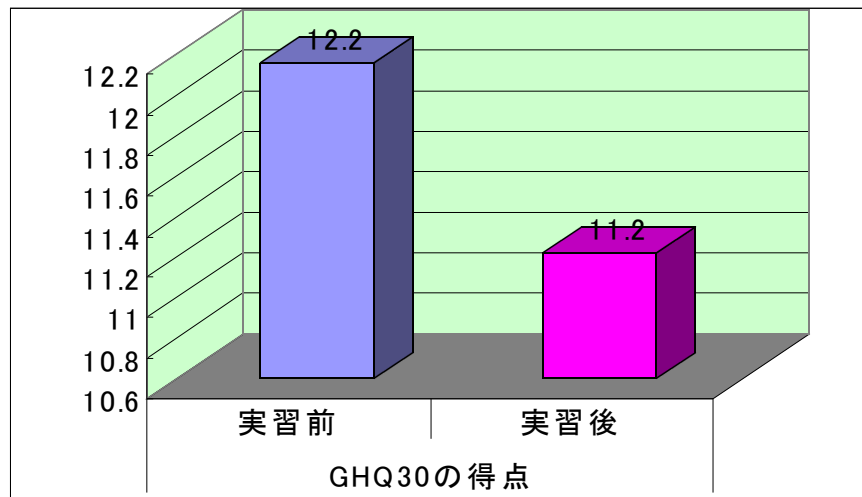
n=55 n.s.

図1. 実習前後のSE尺度得点

### 4. 健康状態

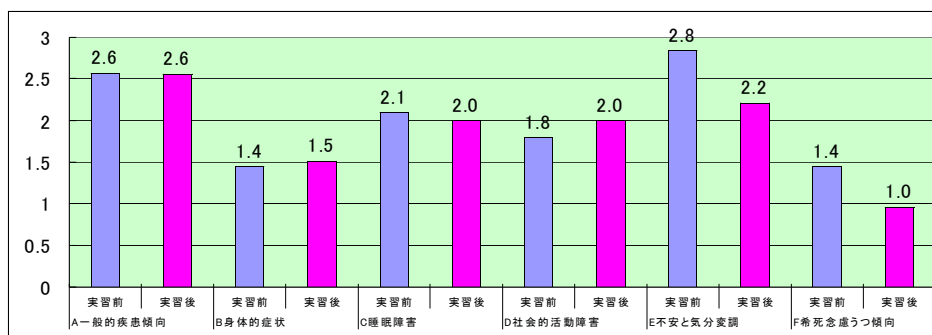
健康状態を、一般健康調査質問紙法 (GHQ30) を用いて自記式にて調査した。この尺度では点数が低いほど健康度が高いといわれている。実習前は平均 12.2(SD6.2)、実習後 11.2(SD6.1)と多少の低下がみられ、良好に変化している傾向はあったものの、有意差はなかった。(図2) しかし GHQ30 を構成している因子である 6 項目、a 一般的疾患傾向、b

身体的症状、c 睡眠障害、d 社会的活動障害、e 不安と気分変調、f 希死念慮うつ傾向について検討していくと、「不安と気分変調」「希死念慮とうつ傾向」で、実習後に有意に低下した。(P=0.05、P=0.03) 一方、「一般的疾患傾向」「身体的症状」「睡眠障害」といった身体面の健康状態では、実習後に高くなる傾向がみられた。



実習前n=55 実習後n=55 n.s.

図2.実習前後GHQ30項目得点



実習前n=55 実習後n=55 E項目p=0.05, F項目p=0.03,

図3.実習前後GHQ6項目

## 5. 実習での体験

母性看護実習における体験内容と体験した人数は表2のとおりである。分娩の見学は78.2%が体験していた。褥婦を受け持ったり、新生児の沐浴、新生児を抱くことは、ほぼ全員が体験していた。

表2 実習での体験

項目	はい 人(%)	いいえ
分娩を見学した	43人 (78.2)	12 (21.8)
褥婦を受け持った	55 (100)	0
沐浴をした	55 (100)	0
新生児を抱いた	54 (98.2)	1 (1.8)
哺乳をした	31 (56.4)	24 (43.6)

実習に対する満足度を、「母性看護実習について満足でしたか」と設問し、4段階で回答を得た。「そう思う」31人(56.4%)、「ややそう思う」23人(41.8%)、「やや違う」1人(1.8%)という結果で、ほとんどが満足していたと答えていた。体験と満足度に関係があるかと検定したが、有意差はなかった。

## 6. 実習前後の Self-Esteem に影響を与える要因の検討

Self-Esteem の測定値を独立変数に、GHQ30 を構成している因子である6項目、a 一般の疾患傾向、b 身体的症状、c 睡眠障害、d 社会的活動障害、e 不安と気分変調、f 希死念慮うつ傾向を従属変数にとり、実習前と後それぞれ重回帰分析を行った。その結果、実習前では「不安と気分変調」が、実習後では「社会的活動障害」と「不安と気分変調」の有意確率が0.05以下であった。したがって、実習前は「不安と気分変調」が、実習後では「社会的活動障害」と「不安と気分変調」が Self-Esteem 得点に影響を与えていると考えられた。

## 7. 親子関係診断尺度 (EICA) について

親子関係診断尺度 (EICA) の分析、Self-Esteem 得点と親子関係 (EICA) の関係、母性看護の実習体験内容、体験に対する自由記述の感想については、現在、分析中である。

## IV 考察

看護学生にとって、臨地実習が学習過程に与える影響が大きいことは周知の通りである。本研究では、生活習慣や健康状態、実習体験内容、セルフエスティームから母性看護実習前後における学生の変化を捉えようとした。健康習慣は睡眠時間が十分でない学生が多かった。また、朝食をとっていない学生もおり、看護実習中では必ずしも好ましい生活習慣といえない状況が示唆された。この生活習慣が実習前後でも差がなかったことから、慢性的な睡眠不足を抱える学生の状況を示唆している。セルフエスティームの高い学生は生活習慣においても望まし方向にある<sup>10)</sup>、という大学生を対象とした報告があるが、単に看護実習中による生活習慣なのか、一般大学生との比較からさらに検討していく必要があると

いえた。

母性看護実習前より、実習直後ではセルフエスティーム得点に上昇傾向があったものの、有意差はなかった。出産経験のとらえ方が自尊感情に影響を及ぼす<sup>1)</sup>、という報告があるが、今回の調査のように出産の実習体験だけではセルフエスティームに影響を及ぼすまでにはいたらなかったと考えられる。菅野らは各論実習が始まる前と終了後におけるセルフエスティーム得点には有意差があったと報告しており、今回我々が考えた実習内容がセルフエスティームに影響するということより、セルフエスティーム得点の上昇にはある程度の期間を要するのではないかと、という示唆を得た。今後も検証していきたい。

しかしながら、一般健康状態では、実習後の「不安と気分変調」「希死念慮とうつ傾向」の項目が有意の差で低下しており、母性看護実習が精神健康状態に正の影響を及ぼしていることが示された。セルフエスティームの形成には親の養育態度が影響するといわれているが、母性看護実習では他者をとおして養育を体験するという貴重な機会を持つことができ、生命誕生に関わる実習内容が学生の精神健康状態に影響しているものと思われる。体験した項目ではその関連が見出せなかったが、詳細な実習内容を検証し個別的な関連について検討していきたい。

今回看護学生のセルフエスティーム得点を測定した結果、一般的に言われている青年期の得点の低さ、あるいは女性の得点の低さが、看護学生でも同様の傾向があることが認められている。加えて、看護の実習は、学生にとってさまざまな不安や緊張の中で行われており、それらがセルフエスティームに影響しているだろうことは推測できる。学生個々の背景や親子関係からもさらに分析を進めていきたい。

#### 引用文献

- 1) アンソニー・ギデンス、松尾精文他訳：社会学、而立書房、1997.
- 2) 菅佐和子：SE (Self-Esteem) について、看護研究、17(2)、17-21、1984.
- 3) 中出佳操・高村寿子：心健康教育プログラムの実践と自己効力感、思春期学 21(3)、272-275、2003.
- 4) 堀田法子他：中学生・高校生の自律神経性愁訴と生活習慣との関連について、学校保健研究、43、73-82、2001.
- 5) 川端徹朗他：ライフスキルと生活習慣との関係に関する縦断的研究(1)-セルフエスティームと生活環境、学校保健研究、39、274-275、1997.
- 6) 村松常司他：大学生の健康に関する研究、教育医学、44(3)、537-548、1999.
- 7) 高倉実他：高校生の抑うつ症状と健康習慣との関連について、学校保健研究、38、335-345、1996.
- 8) 武田敏：学童期・思春期の自己肯定感（セルフエスティーム）と自己効力感（セルフエフィカシー）教育実践、思春期学 19(1)、115-121、2001.
- 9) 中出佳操・高村寿子：心健康教育プログラムの実践と自己効力感、思春期学 21(3)、272-275、2003.

- 10) 前上里直他：セルフエスティームと生活習慣との関連-大学生を中心として、第43回日本学校保健学会講演集、360-361、1996。
- 11) 三枝清美・前原澄子：出産経験のとらえ方が自尊感情に与える影響について、19-26

#### 参考文献

- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編著：セルフ・エスティームの心理学，ナカニシヤ出版，1994。
- 三枝清美・前原澄子：出産経験のとらえ方が自尊感情に与える影響について，日本母性看護学会誌 2(1)，19-26，2001。
- 菅野久美子他：看護学生の自尊感情の変化，第 28 回日本看護学会集録（看護教育），129-131，1997。
- 林公子・熊澤千恵：セルフ・エスティームとエゴグラムからみた看護学生の変化，愛知県立看護大学紀要，1，97-104，1995。
- Goldberg,D.P.（原著）・中川泰彬他（日本版著者）：日本版GHQ精神健康調査表手引，1985。
- 植田誠治：教育現場における自己効力感，思春期学 21(3)，267-271，2003。
- Breslow,L.：Health and Ways of Living，Oxford University Press，1883。森本兼囊 監訳，生活習慣と健康—ライフスタイルの科学—，HBJ 出版，東京，61-93，1996。
- 野口京子：自己効力，思春期学 21(3)，263-265，2003。
- 渡辺登：質問紙法による大学生の精神健康調査，社会精神医学 15(4)，269-275，1992。
- 吉田卓史・多賀千明・吉田洋美・福居顕二：強迫性障害—II D2-4 強迫障害患者における両親の養育態度の評価— Parental Bonding Instrument(PBI)による研究（Ⅲ），精神経誌，101（11），1999。
- EARL.S.SCHAEFR：CHILDREN’ S REPORTS OF PARENTAL BEHAVIR :AN INVENTORY.
- Gordon Parker, Hilary Tupling and L. B. Brown : A Parental Bonding Instrument , British Journal of Medical Psychology , 52 , 1-10 , 1979.
- EARL.S.SCHAEFR, & RICHARD Q. BELL : DEVEROPMENT OF A PARENTAL ATTITUDE RESEARCH INSTRUMENT , CHILD DEVEROPMENT, 29(3) , 341-361 , 1958.
- ALFRED B. HEILBRUN, JR : Parental Model Attributes , Nurturant Reinforcement, and Consistsncy of Behavior in Adolescents, CHILD DEVEROPMENT, 35, 151-167, 1964.
- TOSHIAKI FURUKAWA : Perceived parental rearing, personality and mental status in adolesents, journal of Adolescence, 15, 317-322, 1992.
- RAYMOND B. CATTEL, & BIEN TUJIOKA : THE IMPORTANCE OF FACTOR-TRUENESS AND VALIDITY, VERSUS HOMOGENEITY AND ORTHOGONALITY, IN TESTSCALES, EDUCATIONAL AND PSYCHOLOGICAL MEASUREMENT, XXIV (1), 3-31, 1964.

ALFRED B. HEILBRUN, JR, & HELEN K. ORR, SMUSEL : PATTERNS OF  
PATTERNS OF PARENTAL CHILDREARING AND SUBSEQUENT  
VULNERABILITY TO COGNITIVE DISTURBANCES, Journal  
of Consulting Psychology, 30 (1), 51-59, 1965.

辻岡美延・山本吉廣：親子関係の種類－親子関係診断尺度 EICA －, 教育心理学研究,  
26(2), 1978.

辻岡美延・山本吉廣：子どもの出生順位による親子関係と人格形成, 関西大学社会学部紀  
要, 8(1), 1977.

辻岡美延・山本吉廣：父母による親子関係の認知－養育態度・行動の同調性について－,  
関西大学社会学部紀要, 8(1), 1977.

坂戸薫・染矢俊幸：PBI (Parental Bonding Instrument) とうつ病, 精神科診断学, 10  
(4), 399-407, 1999.

小嶋秀夫：親の行動インヴェントリー (PBI) の検討－Balanced Scales －, 金沢大学  
教育学部紀要, 19, 1970.

平成 18 年 3 月 17 日提出